

若いお母さんたちへ



はるにれの会

橋本 都

こんにちは。このシリーズでお会いするのも、三回目になってしまいました。この「一年」は、私にとってはあっという間でしたが、息子Hの一年をふり返る時、随分と違ってきたように思われます。Hも小学六年生となり身長も伸びてきて、体つきもブクツとしていた幼児の頃とは全く違ってきました。先日電話で話をするのがあったのですが、我が子ながら耳を疑ってしまう程、大人びてきて驚かされました。精神的にもだいぶ成長してきたようです。

ある夏の日のこと、Hと大阪から遊びに来ていた姪、甥を連れて、海猫の繁殖地、蕪島に行きました。この島は私の住む市の鯨という港にある周囲一キロもないような小さな島ですが、日本有数の繁殖地で、島全体が神社になっています。『ウミネコのエサ』と称して売られているエビセンを買い、辺りにまくと、それをめがけて海猫がやってきます。エサに群がる海猫をみると、その眼の鋭さに驚かされてしまいました。八月ともなれば、ヒナ鳥も成鳥とあまり変わらない大きさになり、羽

が茶色いので区別がつくだけになってきました。

鳥の世界では、ある程度まで大きくなるとヒナとはいえ、自分でエサを求めなければならぬのです。そして強者だけが生き残れるのでしょうか、エサをめぐる激しい競争が展開され、優しい眼をしたヒナ鳥がとれるようにエサを投げるのはとても難しいのでした。でも、何とかしてヒナ鳥に食べてほしくて、三人の子ども達も躍起になって茶色の鳥めがけてエサをまきました。

このような海猫の生態をみたり、夏のいくつかの出来事から、私は「人が優しくなる」というのはどんなことなのか、考えさせられました。

夏休みになると、近所の公園で町内のおじいさん、おばあさんが、ゲートボールの練習をするのですが、H達数人の子どもを誘ってくれるのでした。昨年も一昨年も老人と子どもが交じって練習していました。私から見ますと、小学生も高学年になると、体力や運動能力も母親以上になってきて、てっきり子ども達の方がうまいのかと思っていましたら、とても上手なおばあさんもいると

のこと。学校の部活動があって参加できない時は、しきりに残念がるほどでした。

老人と子どもが仲良く並んで順番を待ち、ゲームを楽しんでいる……こんな風景をみて私達母親の年代と老人がこんなに自然なかかわりを持てるだろうかと思ってしまう。サークル活動などでも同世代が多く、親との同居以外には自然にふれ合うことはあまりないのではないのでしょうか。子どもの世界は、私達から見るとわからない事も多く、閉じているようですが、かえって我々よりもずっと自然でオープンだと思えました。また老人達も子どもとの交流を心から楽しんでいるようでした。

Hは現在、私の両親、つまり母方の祖父母と一緒に暮らしています。母は、母親の私以上に甲斐甲斐しく孫の世話をしてくれます。私は仕事を持っていますし、母は専業主婦ですから、家の中のことを取りしきっているわけで、時にはなんとなく「子どもをとられた」ような気持ちになったこともありました。でもHは寝る時は必ず私のもとに来るのでした。言いたいこと、楽しかったこ

と、いやなことなど、布団に入ったHの横でふざけ合いながら聞くのが日課で、絵本を読んだりいろいろな話を
する大切な時間でした。

さて最近、思春期にさしかかったせいとか、祖母の細々とした注意を素直にきかず、いわゆる「反抗的態度」に出ることがありました。でもよく見ていると、Hが今やろうとしていることを先まわって命令口調で言うことが多く、やらない、だらしない悪い子と決めつけられているような気になるらしいのです。私も「親が厳しくないから素直でない」「子どもがそういう態度の時は親も一緒になって叱るものだ。」と言われるのですが、二人の間に立ってオロオロすることもあります。でもHの様子は、まさに二十数年前の私の姿であるように思います。命令に素直にハイと言って行動していれば親は満足で気分がいいのですが、子どもにとってはまるでロボットのような気がするのではないかと思います。
こんな事を書きますと、我が家はうまくいっていないんじゃないかと思う方がいるかと思いますが、決してそ

うではありません。祖母がこんなに言うのは、仕事を持っている私にかわって育児の責任の一端を担っているという気持が強いからでしょうし、そういう気持もわかっているつもりです。それに私自身欠点の多い人間ですから、こうしてHが祖父母に囲まれて育てられることを、ありがたく心強くも思っているのです。

両親にとっても孫との生活は楽しいらしくHのために土曜の昼にホットケーキなど好きなものをつくったり、よその人に孫自慢をすることもあるようです。もし、一緒に生活していなかったら、こんな事にも興味を持たなかったかもしれないと言って、いつも喜んでくれます。でも、子どもというのは正直ですから、祖父がタバコを喫むと、途端にいやな顔をして咳をし、やめさせようとするんですね。タバコが悪い悪いと言われている、なかなか大人は実力行使できないのです。

それから、以前テレビで平均寿命が発表された時のことです。Hが祖父の年齢を聞き、ひき算をして「あと十二年生きるんだね。」と言ったのです。まだ現役で仕事

をしている祖父にとっては、かなりショックだったようです。こんなところが子どもらしいですね。

さて、Hには、自動車で五分位の所に父方の祖父母がいます。Hが赤ん坊の頃、同居していたこともあって、その成長をとでも楽しみにしています。Hが卓球で入賞したことを報告にいくと、祖母は、まるで自分の喜びのように思い、自分の若かった遠い昔を思い出し、「私も卓球の選手だったのよ。私の時は台から離れて打ったけど、今はどう？ Hと試合してみたいわねえ。勝てるかしら。」と生き生きとして喋り出すのです。年老いて体も弱り、記憶力も弱った祖母は何度も同じことをHに聞くのですが、Hも丁寧に答えています。子どもの未来ある姿というのは、何と老人を生き生きさせるものかと思えます。

Hは家に帰ってから、「何度も同じことを聞くんだね。」とポツリ言いました。誰でも年をとるとそのようになってしまうし、皆で大切にしていなければならないことを話しました。Hも「今何年生？」「何部に入っ

ているの？」など聞かれ、祖母が自分のことをよく知っていると思っていただけにびっくりしたようです。

つい数年前なら、私も同じ事を繰り返し繰り返し聞かれたり、物事に固執して自分の考えをかえなかったりしたら、とてもうんざりしてしまっただけかもしれません。しかし、自分自身も白髪がふえ、たまに物忘れすることもあり、年月を経て人間は老いを迎え、こういう状態を受け入れていかねばならないと思うようになりました。そしてHも老人との暮らしの中で、老人の思いを感じることもが少しでもできたのではないかと思うのです。

ある時、たまたま義母のワンピースの袖が少し綻びているのを見つけ、直してあげようと思いました。すると、義母は、

「私はお裁縫得意なのよ。でも、同じ色の糸がなくなっただね。」

と言います。裁縫が得意なのは、一晩で単衣をつくったりしたのを見えていましたからよく知っています。

「お母さん、縫うのは速かったものね。まあとちあえず

黒糸でもいいし、応急処置をしておきましょう。夜は針が見えにくいし。ネグリジエにドレスアップしてきて下さい。」と言いましたら、

「あんたがやってくれるって、うれしいからやってもらうのよ。」と話し、着替えてきてくれたのです。

私にはこの小さな出来事がとても印象に残っています。誰にでもあるでしょうが、この義母の自尊心を傷つけられたくない気持が、痛いほどわかりました。そして優しく私の求めに応じてくれたことをうれしく思っています。

さて、父方の祖父母は同居していないせいか、Hに会う度に一段と大きくなったと思うようです。

この祖父は、眼が不自由なのですが、本が好きでいつも夜遅くまで大きな虫メガネで字を覗きこむようにして読書しています。何度か死ぬ目に会いながら克服してきました。八十歳を過ぎて、健康に気をつけながらきちんとした生き方をしている祖父をHはとても尊敬しています。

Hが六年になる時に、祖父はHを呼んで、次のような話をしてくれました。

「これから将来何になってもいい、好きな仕事をして、どこに行っても頑張ってもらいたい。しかし、いざという時、人から相談を受けられる人物になってほしい。」と。

私はその時の緊張した雰囲気をおぼろげに覚えていることができません。祖父にとっては「あと一年」と若い人が簡単に言うけれど、その一年さえ生きていくかどうかと思うのだそうです。ですから、Hに言っておきたいと思ったのです。こうして祖父が孫を一人前の人間として話をしてくれたことに感謝したのです。

話は変わりますが、先日、久しぶりに中学時代の友人に会いました。彼女には三人の子どもがいるのですが、末娘が障害児です。出産は正常でしたし、少し大きくなるまで気がつかなかったとのこと。ただ上の二人に比べてあまり泣かず、大人しい手のかからぬ子どもだと思っていました。医者のお話だと先天的なものではなく、

そういうえば生まれてまもなく高熱をだしたことがあったとか。

彼女は毎日、養護学校に併設されている保育施設に治療訓練と保育のために通いました。上の兄や姉もはじめは赤ちゃんだから、歩いたり言葉を言ったりできないのだと思っていたそうですが、今では妹の状態をわかりながらも、一緒になって喧嘩したり、とてもよく面倒をみてくれるようです。

私がこの友人に感心するのは彼女の生きる姿勢です。

末娘が歩けるようになると、知り合いの障害児を受け入れている保育園に入れ、その時間、自分は叔母さん御夫妻が経営している障害者の授産施設で働きはじめたのです。しかし、来年から養護学校に入学することが決まったものの、学校が効外に移転することになり、送り迎えに時間をとられるので、勤めの方は辞めざるをえなくなりました。

これまでにはどんなにか苦労があったと思いますが、いつも落ちついて、最近はこんなことに興味がでてき

て、いたずらで大変と語る彼女の姿に圧倒されるものがありました。

それにしても、養護学校に入るのも申し込みが多く、大変なことを初めて聞きました。彼女は「たまたま運がよかった。」と言っていました。が、就学猶予にしなければならぬケースも多いのだそうです。学校に入ることにはどんな子どもにも保障されていると思っていましたのに、身近なところにこんな問題があったことを知りませんでした。

今や学校は知識のみを得る受験競争の場となっている感があります。しかし、もっと大切な、家庭とは違ったいろいろな人々との関わり、新しい物との関わり、そしてそこから産み出される新しい可能性をもたらず場であることを忘れていのではないのでしょうか。

実は私は高校教員をしているのですが、高校生でも、ちょっとした言葉の行き違いから無視されたらと悩む例があります。友人との付き合い方もぎこちなくて、自分をうまく表わせぬまま、他人に合わせすぎて辛くなった

り、反対に人の気持を全く考えず、自分をコントロールせずに行動する。そして他に求めるばかりで自分が他のために行動することができないなど、どうも人間関係がうまくゆかないのですね。家庭でも社会でも、いろいろな子どもや大人がいて、いろいろ困ったり悩んだりする中で生きていくという訓練がなされてないように思います。

とりとめもないお喋りをしてしまいました。

私自身、Hを育ててきたことを思い返せばこれまで述べた事などほとんど考えていなかったでしょう。例え考えていたとしても観念的なものにすぎなかったと思います。しかし、現実の生活の中で、私は私としてありのままに触れることができた時、少しでも「優しさ」を持つことができるのではないかと思います。

そして、幼い者が育つうえで、いろいろな形があるにせよ、老人とふれあったり、世の中には弱い立場の人々がいて、困っていることもいろいろあるのだということ、シャットアウトしてはならないのだと思いました。

お恥ずかしい話ですが、もう七、八年も前の事です。私は一度だけ、息子の前で泣いたことがありました。大抵はどちらかというとポヤッとしている人間ですが、あの時は母に自分の気持を全く理解してもらえなくて悔しくて涙がとめどなくこぼれたのです。Hは私が具合が悪いと思ったらしく、タオルを絞ってベッドに寝ている私の額にのせ、横に顔をすりよせてきたのです。そして一言もいわず、じっとしているのです。私は今度はうれし涙が出てとまりませんでした。

普段は生意気な少年であっても、時として自然に祖父の手をひいたりしているのをみて「優しさ」というものは、大人が口で教えることではなく、もっと奥深いところで自然に湧くようにして出てくるものであると感じています。そしてこの優しさが、強さ、勇気につながるような生き方をしたいのだと思いました。